

宮 鍋 織 著

『ソヴェト農産物価格論』

丸 毛 忍

本書は、著者が一九五八年から六六年までの間に『経済研究』、『一橋論叢』に発表された諸論文を新しく訂正、加筆して一本にまとめられたものであり、最近のソ連における「農産物価格論議の主要な問題点の考察」を主題としている。

周知のように、ソ連はいま「経済改革」の渦中であり、現行価格の根本的改訂が日程に上り、実際に生産財卸売価格の第一次改訂作業を終わろうとしている状況にある。この動きはいずれ農業部門にも全面的に及んでくるはずだ。本書の主題が「経済改革」の基柢にある理論的諸問題と深いかわりをもっていることは自明であろう。

従来、ソ連の農産物価格は全く恣意的政策的に決定され、価

値や生産費とは関係がなく、むしろ農業の正常な発展をひきめがめる作用を果たしてきたと考えられており、スターリン時代にはソ連の学者にとって農産物価格を論ずることは一種のタブーだったようだ。これが解禁されたのは、新しい経済発展の見地から、農産物価格も自らの価値を実現し、蓄積を行ないいうるようなものになるべきことが客観的に要請されはじめて一九五七、五八年以後に属し、まさに著者が農産物価格の研究に着手された時期と符合している。したがって、本書はソ連の農産物価格に関するわが国では最初のまとまったモノグラフィだといつてよいだろう。

本書は、①現行農産物価格制度の解説、②農産物価格形成の原理、③差額地代の成立根拠と分配の三つの部分からなる。論述にあたっての著者の主たる努力は、ソ連における論争の厳密な整理・紹介をつうじて、主題の理論上の問題点を明らかにすることに向けられており、そのかぎりにおいて著者の意図はかなり見事に果されているといつてよい。著者がソ連文献の涉獵と問題整理のために行なった厳正良心的な作業をまず何よりも高く評価したい。

著者の狙いは、ソ連学者の所説の紹介をつうじて出来るだけ客観的に問題を解明することにあるので、自己の見解を積極的に展開することはむしろ避けておられる。だが、ソ連学者の所

説の矛盾やマルクス理解の誤りを指摘しながら、農産物価格については限界原理、「生産価格」説を押し、差額地代の成立根拠については、①土地の有限性、②土地の豊度と位置の差、③企業の経済的自立、④商品生産の価値法則をあげ、差額地代の源泉については流通説をとり、地代の国家収用については「労働に応ずる」分配原則、土地固有の経済的実現形態の二理由を支持しておられるなど、著者の立場は、ソ連学界の主流の見解に近いもののように想像される。

ソ連における論争は農産物価格の改訂、差額地代の国家と企業との間の配分方式などについての極めて実践的、政策的な目的をもっているが、そこで展開される議論はすべて原理的であり、たとえば現行価格の具体的数量的分析をつうじて、自己の主張を根拠づけ、政策を鋭く批判するようなことはほとんど行なわれない。したがって、このようなソ連の論争のパターンの枠内で問題を取り扱うと、問題の重要な側面が見落されることになりやすいのは止むを得ない。本書がソ連における論争の紹介としてはすぐれているが、農産物価格論としては物足りない感じをうけるのはそのためであろう。ことに、著者が農産物価格の個々の構成要素について論じていられないのはともかくとして、農産物価格と農民の労働報酬との関係を全くネグっておられるのは、このような一般原理的な取り扱い方をした本

としても、問題ではなからうか。取引税についてもっと違った扱い方があったように思う。本書での主題ではないとしても、ソ連の農産物価格形成の背後にある諸関係、農業の発展および農業と他部門との関係における価格の機能ないし役割が、少なくとも資本主義経済の場合とどう違うか、はつきりしないのも、上記の点と関連があろう。

とはいえ、以上のような指摘は本書の本来の価値を低めるものではない。読者は本書をつうじて農産物価格形成をめぐるソ連学者の問題意識、その諸見解、理論水準などを正確に知り、さらに、バシニーク地帯別価格モデルおよび土地料金制（借地料）説の紹介などから、農業における「経済改革」の方向をくみとることができよう。本書は小冊子ながら、わが国のソ連研究のすぐれた学問的成果の一つに数えられるものであり、著者は農業問題研究の最初の拠点を立派にきずかれたというべきであらう。書評者の要望したような諸点について、今後の研究発表に大いに期待していることを書きそえておきたい。